

「明るい泌尿器科診療」を掲げて

にしの腎・泌尿器科クリニック

西野 安紀 院長



「もっと気軽に相談できる泌尿器科を」―大阪市中央区谷町4丁目の医療ビル6階にある「にしの腎・泌尿器科クリニック」は、女性医師による泌尿器科専門クリニック。西野安紀院長は、基幹病院で長く泌尿器科診療に携わり2022年5月に開業。高齢化社会や生活習慣の変化に伴って泌尿器科診療の重要性が増している中、多くの患者を診てきた西野院長は「性別や年齢に関係なく、困っている患者さんが気軽に相談できる泌尿器科クリニックを」と話している。

（聞き手・池田知隆）

―女性医師が診る泌尿器科専門クリニックは珍しいようですね。

これまで私が勤務していた病院の患者さんは、大半が高齢男性の方でした。しかし最近「おしっこ」などで悩む女性の患者さんも増えてきており、また検診や人間ドックの受診率が増加するにあたり、泌尿器科を受診する患者さんは、男女関係なく増加傾向にあると実感しています。性別問わず、泌尿器科はデリケートな部分でなかなか症状を話しづらいことも多いため、泌尿器科受診というハードルに加え、医師としての話しやすさが要求されます。

そのような状況の中で、女性患者さん限定の女性の泌尿器科クリニックは需要が増えてきているものの、男女両方を診る一般泌尿器科疾患を、女性医師が診るというクも他科の医師とともに協力して行っていました。ただ、以前より思うように手術を行うことができない状況になったり、学会などの集會も容易に行えない状況に、世間の人たちだけでなく、医師としてもかなりしんどい時期だったと思います。

自身も医師になってから10年近く経ち、ちょうど手術の腕も磨いてきたところだったので、今後、このコロナ禍の中でどのように泌尿器科医として働いていくのかを考えた時期もあります。手術をするのが楽しくなり、自信もだんだんついてきた時でしたので、開業するという選択肢は、最初は全くありませんでした。

そんな中、開業に舵を切ったのは、医師仲間の一言でした。「泌尿器科って、もともと受診しにくい科よね。しかも女性医師の泌尿器科医って、婦人科の女医ならまだ印象良いイメージだけれど、泌尿器科の女医って大変そう」と言われたんです。そんなに「泌尿器科が」「女性医師が」「ハードルに思われる科なのかと改めて実感しましたが、逆手にとって、10年以上楽しく泌尿器科医をしていた私って、案外需要あるのでは？と思ったのが、きっかけです。

このコロナ禍で、今後どのように泌尿器科医として続けていくかを模索していた中、ひとつの選択として、患者さんに近いクリニックでの開業も視野に入れた時でした。

―こちらのクリニックの特徴は

ここは医療ビルの6階で、8階では母がレディースクリニックを開業しており、下の階には整形外科、眼科、耳鼻咽喉科、1階には薬局が入っており、当ビルの最後の患者さんが帰るまで開けていてくれます。向かいのビルには内科、徒歩圏内で皮膚科、精

リニックは実はあまりありません。やはり、泌尿器科は男性医師が診るというイメージが根強いのでしょうか。

そんな中、泌尿器科の患者さんは老若男女関係なくいらっしゃるのが現状で、話しにくい泌尿器科領域での診療ですが、私は持ち前のおしゃべりな性格で、患者さんと明るく悩みを語り合いながら治療につなげていけたらと思います。性別関係のない一般泌尿器科クリニックとして開業しました。

―医学はどこで学ばれたのですか？

高校生まで大阪の天満橋で育ち、大学は金沢医科大学（石川県河北郡内灘町）に進学しました。夏は海、冬は雪に埋もれる大学生活は新鮮でしたが、学業の合間に、居酒屋や家庭教師のアルバイトをしてみたり、休暇

神科もあります。近くの大手前病院、大阪国際がんセンター、大阪医療センターとも連携しており、特に当院は大手前病院とは連携が強く、CTやMRIの撮影は電話で当日撮影・読影までしてくださるので、撮影後すぐに当クリニックでの結果説明が可能です。全身状態が悪い患者さんが来院された場合は、夜間であっても緊急の必要性があれば受け入れてもらえます。ある意味、この辺りは小さな医療区域となっていますので、クリニックとはいえ、病院レベルに近い連携が取れるのが、うちのクリニックの利点だと思っています。

またここはビジネス街という場所柄もあり、平日は仕事帰りの17時過ぎ頃から飛び込んで来られる患者さんも多く、また居住区としてマンションも多いため、土曜日には近隣の住民の方もよく来院されます。

まずは、敷居が高い泌尿器科への受診のハードルを下げ、気軽に受診できるようにするがクリニックの役目であり、まずは当院で診断、できる範囲での治療を、そこから手術や更なる精査が必要な場合は基幹病院へ紹介する橋渡しを行うのがクリニックの位置付けなのだと思っています。その地に貢献できるような診療ができたらなと思っています。

―クリニック内の検査機器は充実していますか？

クリニック自体は狭いですが、泌尿器科として一通りの検査が行える設備は備えています。

尿道から細いカメラを入れて膀胱の中を観察する内視鏡カメラ・膀胱鏡は高額なので悩みましたが、泌尿器科では必要な検査です。導入しました。膀胱鏡を置いていな

には行ってみたかった小笠原諸島へ行ってダイビングの免許を取ったりと、学業だけでなく、一人暮らしを満喫していました。卒業後は、もともと大阪が大好きだったので、大阪に戻りました。研修先には、研修医の人数が多く、救急にも力を入れていた社会医療法人同仁（会耳原総合病院（堺市堺区）で2年間研修させて頂き、大変勉強になりました。そこで携わった泌尿器科の先生方が近畿大学医学部付属病院の泌尿器科の先生方だったので、その後、近畿大学との繋がりができました。

―どうして泌尿器科を選ばれたのですか？

実は、私の母も叔母も亡き祖父も産婦人科医で、それぞれ婦人科クリニックを開業しており、ゆくゆくは自分も婦人科の医師になるのだろうかという環境で育ちました。それだけに、私が泌尿器科を選択したことには家族はみんなびびくりしていましたね。

大学では泌尿器科分野の講義はとも少なく、最初はまったく関心がありませんでした。研修医の時、末期の前立腺癌の患者さんを担当したのがきっかけで泌尿器科を改めて勉強した際に、泌尿器科はとても狭い領域だと思っていました。その幅の広さ、奥深さに改めて気づき、驚きました。尿路（腎臓、尿管、膀胱、前立腺）の悪性腫瘍の診断やそれぞれに対しての外科的治療を主に、内科的な排尿症状（過活動膀胱や前立腺肥大症）、尿路結石、性感染症、それに加えて腎移植、人工透析などとても幅広く、また高齢者だけでなく、小児の夜尿症や包茎の手術なども含めて、全世代での疾患があるのだなと実感しました。また、外来で自分が診断した後も、その後の治療手術、放射線療法、抗がん剤治療など、泌尿器科の医師は、

いクリニックも多いですが、当院での膀胱癌の診断も含め、膀胱癌になった患者さんは術後約10年まで膀胱鏡でのフォローが必要なため、大きな病院で手術してもらった術後の経過は当クリニックでできるようにと備えました。また、自動で排尿の状況を客観評価する尿流量測定も検査ができる自動トイレといった最新機器も備えています。

尿の検査では即時に機械で行う定性データが出るのは当たり前ですが、顕微鏡下での沈渣画像をPCモニターで表示し患者さんと供覧できる事は、患者さんによくびびくりされることが多いです。実際、自分の排尿した尿の内容を、自分の目で確認することで、膀胱炎であればたくさん泳ぐ細菌や白血球、たまにトリコモナスが泳ぐ姿など、実際に患者さんと供覧することで、病状の理解を得ることが多いです。

最近では性病検査も当日検査できるようになり、ED薬も院内処方可能です。泌尿器科としての役割をしつかり果たせるよう、狭いクリニック内に、思いをいっぱい詰めて設計しました。

―患者さんの男女の比率はどのくらいですか？

女性の患者さんには婦人科があります。女性の患者さんには「紳士科」なんてないですから、一般的な泌尿器科を受診される患者さんは男性の割合が多いと思います。しかし、私が女性医師であることもあってか、日々女性の患者さんがネットで検索されたり、会社などでの口コミで来て頂くことが多くなってきて、今ではだいたい男女半々ですね。さらに、ここは男女関係ない上、子供も診てくれる泌尿器科だと、家族も連れてきてくれる方も増えてきて、家族ぐ

診断から治療まですべてを通して自分が担当することになります。その魅力もあり、私は泌尿器科にとってもやりがいを感じました。

―基幹病院での勤務はいかがでしたか？

だいたいの病院でも泌尿器科は男性医師が多くを占め、数少ない女医として男社会の中で必死に働いていました。日常の外来から手術に加え、当直や関連病院への夜勤など、当時は数日間連続勤務もよくありました。今では医師の働き方改革もあり、そのような状況はあまりないようですが、当時は家に帰るのが3・4日先になったりすることも。それでも、日々充実した毎日を送っていました。

泌尿器科は医師自体の人数が少ないため、夜勤や当直担当の割合が多く大変な部分がありました。その分、色々な症例を経験することも多く、また若くして手術を任される機会も多く与えてもらえたため、その点ではありがたいと思いました。最近ではロボット支援手術（ダヴィンチ）も盛んに導入され、手術の知名度もあがって泌尿器科の若手の医師も増えてきたのは嬉しいことです。今では開業してから手術ができなくなっただけはちょっと残念な気持ちもありますが、泌尿器科に魅力を感じてくれる医師が増えること、また女性医師が増えることはとても嬉しく思っています。

―コロナ禍での開業となりましたが

2020年ごろからコロナ禍に入り、大きな基幹病院では様々なコロナ対策に翻弄されました。泌尿器科医でしたが、一人の医師として発熱外来やコロナワクチンの対応



受付総

るみで受診していただける方も多くなってきました。

おじいさんは前立腺肥大症、おばあさんは過活動膀胱、お父さんは尿路結石、お母さんは膀胱炎、息子さんは夜尿症で、など3世代での家族受診も増えており、地域に根付いたクリニック診療として、やりがいを感じます。

―クリニックでの特徴的な症例などありますか？

もともと泌尿器科ができたのはこの100年ぐらいで、昭和の初期までは、性病や梅毒は皮膚科の医師が診ていました。いまでも、皮膚科と泌尿器科の両方の看板をあげている開業医も多いでしょう。もともとは皮膚科から派生したのが泌尿器科なので、イメージというと、とりあえず下半身にお

きた異常は泌尿器科、というイメージが強いのでしょね。なので、下半身・生殖器の異常所見として、男性の陰部の皮膚科疾患が、基幹病院よりもはるかに受診率が多いことに驚きました。また、男女関係なく、陰部の違和感や他人との差など(普段は他人と比べることがないので、陰部の様々な疑問を持つ方がこんなにも多いことにも驚きました。

男性で言えば、「左右の睾丸の大きさが違う」というだけで、精巣静脈瘤や精索水腫、はたまた精巣癌などの鑑別があります。が、大半は大した症状でないことが多い中、やはり深刻な症状も潜んでおり、この2年間で4例の精巣癌を診断しました。また、性病であっても、基幹病院ではほぼ見なかつた梅毒が「ただの陰部のできもの」というだけで、2年で約20例の梅毒が診断されました。



尿路結石の碎石手術風景

「ちよつと血尿が出ただけ」で膀胱癌が判明、検診のエコーで「ちよつと腎臓が腫れているだけ」で腎盂癌が見つかったなど、日々の診療で、重篤な疾患を診断することも多々あり、いまだに日々精進している毎日です。

――事前にネットで症状を調べてくる患者さんも多くなりましたが。

病状を自分で調べて来られることのメリットもあれば、デメリットもあります。ネット情報から、自己で診断した病名通りだと思ひ込み、自分で必要だと思つた検査すべてを行わないと納得してもらえない方や、自分が必要だと思つた検査をするに納得いかない方、いろんな方がいます。こちらは、色々な病状を踏まえて必要だと判断した検査を行っているつもりでも、患者さんが自分で思い込んでいた病名でなければ誤診だと言われたこともあります。もちろん、医師も完璧ではないので、すべて正解の診断を下すのは容易ではないですが、私の診断を患者さんが受け入れてくれるかどうかは、根底に医師と患者さんの信頼関係がないと難しいと思います。なので、短い診察の中でどれだけ納得してもらえるか、信頼してもらえらるか、診療を行うよう心掛けるのも、私の仕事だと思つています。ただ、すべての患者さんが私の診療に納得されるわけではないので、ネット上で色々ご意見を頂くこともあり、私を信頼して当院へ通院して頂いている患者さんがいる限り、私は自分の診療を続けていこうと思つています。

――クリニックの医師としての心構え、泌

尿器科医としての生きがいとは

泌尿器科で扱う病気は一通り診療できません。ただ「勃起障害・射精障害・男性更年期」に関しては、やはり男性特有のメンタリティが関わってくると思われ、良くも悪くも、私が完全にカバーできる自信がないため、診療制限をさせてもらっています。デリケートな部分で診療対象だけに、患者さんのお気持ちや生活上の困りことなど、総合的に話を聞きながら診断し治療を行うようにしています。外出時に常にトイレを探す悩み、バス旅行で尿漏れしないかという不安。家族や友人には話にくいし、といって大きな病院にわざわざ行くのはハードルが高いし、と思われがちな泌尿器科。クリニックのホームページでは「寄り添う」と掲げていますが、私はできるだけ同じ目線で患者さんの話を聞いているつもりです。ただ、いろんな方がいらっしゃるつもりで、受け取られ方もそれぞれですので、全ての患者さんを納得させるには思つていません。私の診療スタイルができるだけ多くの患者さんの今後の生活を少しでも明るくできるかなと思つているので、日々診療を行っています。

――若い医療従事者へのメッセージを。

泌尿器科といえば、もともとマイナーで、あまりいいイメージがないと思われがちの科ですが、実は意外と奥深く、おもしろい分野だと私は思っています。泌尿器科の女医が少ないとよく言われますが、最近では「ウロギネ」と言われるウロロジ(泌尿器科)＋ギネコロジー(産婦人科)として女性特有の境界領域にある疾患をメインに、泌尿器科の女医さんも徐々に増加傾向にあります。昨今はジェンダーレスの思想もあり、ウロギネ領域も含めて、性別関係なく泌尿器科に興味をもってくれる医師がもっと増えるといいなと思つています。

西野 安紀 (にしの あき) 院長経歴

日本泌尿器科学会専門医

日本医師会認定産業医

1983年 大阪市生まれ

1996年 追手門学院小学校 卒業

2002年 大谷中学・高校 卒業

2011年 金沢医科大学 卒業

2011年～ 耳原総合病院 研修医

2013年～ 近畿大学付属病院 泌尿器科 入局

2014年～ 近畿大学付属病院 助教

2016年～ 大阪南医療センター 医員

2019年～ 第二大阪警察病院 副医長

2020年～ 泉大津病院 医長

2022年5月 にしの腎・泌尿器科クリニック 開院

にしの腎・泌尿器科クリニック

〒540-0025 大阪市中央区徳井町1-1-8

大手前メディカルセンタービル6階

06-4790-6363

大阪メトロ各線(谷町線・中央線)「谷町4丁目」駅

4号出口から徒歩2分